

パリ通信・第154号

ルーアンのカラヴァッジョ

9月のパリは観測史上最多の降雨量を記録し、10月に入っても冷たい秋雨が続いている。天気予報で雨が降らない日を選んでルーアン美術館へ行った。

パリ・サン・ラザール駅からセヌ川に沿ってノルマンディーの緑豊かな風景を見ながらノンストップ電車でルーアンまで片道1時間半、距離にして150kmである。セヌ川が大西洋に注ぐル・アーヴルに次いで人口12万都市ルーアンはノルマンディー地方の行政中心地だ。「百の鐘がある町」と呼ばれていたようにルーアンはキリスト教の主要な地だったが、フランス革



命時に多くの鐘が壊されてしまった。百年戦争(1339-1453)中イギリス軍をオルレアンの戦いで破り、フランス王シャルル7世を勝利に導いたにもかかわらず、1431年5月30日ルーアンで火刑に処されたジャンヌ・ダルク。現在はその火刑台跡に十字架が高く聳え、鱗のような屋根のジャン・ダルク教会が建っている。また、ルーアンと言えばジベルニーに移住したクロード・モ

ネが描いた「ルーアン大聖堂」連作は誰もが知るところである。

SNCFルーアン駅から歩いて10分の所に「ルーアン美術館」がある。15世紀から今日までの絵画、彫刻、デッサン、美術品を所蔵し、常設展示は無料で有難い。7月シチリア島で殺人犯として逃亡するカラヴァッジョ(1571-1610)の作品を見た。1606年5月ローマでラヌンチオ・トンマソーニを剣で刺し殺し、死刑を宣告され逃亡生活が始まり、1610年38歳で亡くなるまでの劇的で絶えず死の恐怖に生きた画家の深さを感じた。。カラヴァッジョがローマから最初



に逃れた地はナポリである。当時ナポリはスペイン統治下でローマでの裁判が実行し難いからであった。1606年10月から1607年7月まで十ヶ月足らずの短いナポリ滞在中に描かれた作品がフランスのルーアンにあると聞いたので見に行った次第である。

1955年8月ルーアン美術館はパリの美術品オークションで一枚の絵を225,000フラン(=38,900€)で購入した。イタリア人画家マッテア・プレーティ(1613-1699)作「キリストの鞭打ち」として売りに出されたものである。



ところがその後イタリア美術史の大家でカラヴァッジョ研究第一人者ロベルト・ロンギ(1890-1970)の鑑定によりカラヴァッジョがナポリ時代(1606-1607)に描いたものと認定され、ルーアン美術館が所蔵するカラヴァッジョ傑作となった。ロベルト・ロンギの鑑定の大きな拠り所はナポリ・カポデイモンテ美術館にあるカラヴァッジョの同じ題材「キリストの鞭打ち」(286 x 213 cm)(1607)との比較であった。

キリストはローマ人に捕らわれて、裁判で死刑を宣告される。十字架に架かる前に柱に縛りつけられて鞭打たれる。ルーアンの「キリストの鞭打ち」(135 x 175 cm)(1606-1607頃)は左上から当たる光でキリストの肉体が照らし出されている。縛りられた柱には鞭の跡が見えるが、古代彫刻のアスリートのような身体に傷はなく、背景の暗い闇から神々しく浮かび上がり、キリストの横顔は痛々しい暴力場面から遠く離れたところを見ているようだ。鞭打つ男もキリストを柱に縛りつけた男もその表情はまるで思考しているようで宗教画に止まらない力を持っている。落ちていく赤いマントがキリストの最期を効果的に暗

示しドラマ性を高めている。光と影、静と動、神の教えと個人の思い、カラヴァッジョの作品は人の心に深く入り込む力に満ち、魅了される。

ルーアンのカラヴァッジョは135x175cm、横長のサイズで人物は上半身だけの水平の構図である。祭壇画であれば縦長のもっと大きな垂直の構図になることが多いから、祭壇画と同じテーマの個人注文であっただろうと思われる。そのため1955年ルーアン



美術館に購入されるまでには何度か所有者も変わり、カラヴァッジョの作品であることさえ忘れられていた。1606年からのカラヴァッジョの足取りには不明点が多く、人の目に触れず、どこかで眠っている絵が他にもあるかも知れない。何世紀も経って市場に現れた一枚の絵、その数奇な運命を思うと何だか愛着と感動が湧いてくる。